

## 東大自由英作文について

この文章は、東大の中でも自由英作文について述べるものですが、東大英語の全体像の把握のために、東大英語の概略について記したいと思います。

### ■ 東大英語の概略

満点は 120 点。問題構成は 3 種類に大別されます。

長文読解関連問題(要約問題・小説問題・文挿入問題・日本語訳問題)

英作・文法(自由英作文 2 題、文法正誤問題)、

リスニング問題の 3 つです。

各配点は、長文関連は約 60 点弱。英作・文法関連は 30 点。リスニングは 30 点です。

求められる合格点は、文系学部であると 70%以上、理系学部(理Ⅰ、理Ⅱ)で 60%以上、理Ⅲでは 80%以上は必要です。長文読解関連は、各設問共に難度の高い問題が多く、高得点を取ることが難しい問題です。実際、要約問題・小説問題で、本番満点を取れる生徒はほぼ皆無だと思われます。一方、リスニングと英作は毎年出題傾向も安定しているので、対策に時間をかければかけるほど得点の伸びが期待できる分野です。(429 字)

### ◆ 東大英作文(パート1)

#### ■ 東大英作の特徴

ここ 3 年、自由英作文の分野に大きな変化が見られるようになりました。以前であれば問題のネタも予想できる程度の難易度であったのですが、問題の切り口が全く変わってしまいました。以前の問題の典型例としては、2008 年『今後 50 年の間に起こる交通手段について』、2010 年『世界言語が統一されたら我々の生活はどのような影響を受けるのか。』などで、東大を受験する生徒の問題意識を考えると、全く難問ではなく、入試本番でもそれなりの解答を書ける問題でした。実際、指導していた学生も、再現答案を確認したら、十分合格答案と呼ばれる英語を書いていました。

#### ■ 東大自由英作文の最近の変化とその解答例

2014 年度から問題の様相に大きな変化が見られました。具体的な出題としては、People only see what they are prepared to see. という、入試本番で直面したら、頭が真っ白になってしまうものでした。そもそも、当日の東大受験生もこの英文を正確に理解するのにも困難が伴ったのではないのでしょうか。直訳すると、『人々は見ると準備の出来ているものしか見ない』となります。正しい日本語訳ができて、入試本番のパニックしている状態で何を書けばいいのか、となったことでしょう。見る準備のないものは見ない、つまり色々な情報・光景が目飛び込んで来ても、人間はもともと思っているものしか見ない、ということです。

受験生が共感できる解答の内容として考えられるのは、

- ① クラブ活動で顧問に頻繁に叱られる。
- ② 自分の努力をわかってもらえないと思い、顧問が自分に意地悪をしていると思う。
- ③ 後になり、クラブ活動で結果が伴った時に初めて、自分のことを考えて、顧問は叱ってくれていたのだ、と気づく。
- ④ 怒られている時は、自分の正しさしか考えていないので、問題文にあるとおり、自分の見たいものしか見ない、という現象にまさしく当てはまる。

#### 参考例

A student has always been trying hard to get a good result in club activities, but a coach scolds him even for a small mistake. He may think that the coach is just wicked, not trying to understand how much effort he has made. But only after he succeeds does he realize the coach scolded me for the benefit of his growth. This example applies to this saying.

内容としては、高校生が日常生活で遭遇する可能性が高いごく平凡なものです。クラブ活動に入って、顧問の先生に怒られる。こういった場合の典型的な反応としては、『自分の努力を理解してくれない顧問は嫌いだ！』となり、クラブ活動に参加しなくなる、ということは本当によくある話です。この問題の出題意図を見る限り、このような反応をしてしまう生徒は、東大の問題を解くことは難しいのだと思います。つくづく東大の問題というのは、学力面だけではなく、受験生の総合力を求めているのだと考えさせられます。

東大がこの英作文で求めている能力というのは、『日常生活で起こっている出来事を自分なりに深く考察し、どれだけ抽象化できるか。』というものと言えます。端的に言えば、『**自分以外の視点で物事が見ることができるか。**』裏を返せば、日常の出来事について何も感じなかったり、感じたとしてもただ感情的になっているだけでは、このような英作文に答える土台はできない、と言えます。

#### ■最近の傾向に合わせた対策

**親の子どもに対する接し方、子供と過ごす時間が非常に重要！**

日常の出来事を抽象化して考えてみるのが一番重要！

そのためには、自分以外の視点を持つ人(具体的には保護者。)と冷静になって出来事を振り返るのが効果的だと思います。保護者だと、子供の気持ちも踏まえつつ、客観的な視点で物事を伝えられるのではないのでしょうか。日々、このような作業を繰り返していけば、子供は自分以外の視点を持てるのを期待できます。

幼少期に保護者と話をしている子供は国語的な能力(読む、書く)の高い、という話をよく耳にします。これは、保護者と話すことを通じて単に語彙力が増すというメリットがあるだけでなく、自分だけでは気づかない新たな視点を保護者の話から供給されているからではないでしょうか。他者の視点がある子供は、問題文の題意を慎重に読み取り、題意に沿った答えが書けるのではないのでしょうか。結果として、文章力が高く評価され、国語力が高いということになると思われます。

一方、自分の視点からしか見ることができない子供(つまり一人よがり系。)の生徒は、自分の価値観だけで文章を読むので、自分の価値観から外れた内容の文章は最初から切り捨てる傾向にあるように思えます。『問題が解ければそれでいいのだ』的な発想が根底にあるように思われます。そのような生徒は、この英作文を見て表題の英文の日本語訳は浮かんだとしても、何を書けばいいのかわからないでしょうね。

保護者ができる最高の東大対策というのは、保護者の方ができるだけ多くの本を読み、様々な視点を持ち、子供の話を実際に聞き、子供と異なる角度から意見を伝えてあげて、子供の視野を広げてあげることではないでしょうか。そして、その単純で地味な作業を家庭の中で繰り返すことではないでしょうか。

東大の問題というのは、ただ受験勉強の対策の量を競うのではなく、どのように育ってきたのかが本当に重要だと思われる出題の問題です。

## ◆東大自由英作文について(パート2)

このパートでは 2016 年度の写真の問題について述べていきたいと思います。

この問題設定を見た学生は、まず初めに、この写真は何だ、一体何を書けばいいんだと、考えたことでしょう。私自身も、問題を見た時、一瞬面を食らった覚えがあります。この写真を見て思うことについての英作文が求められています、勘違いしてはいけないのが、この写真の状況説明を求められているわけではないということです。この写真の説明だけをするならば、遠近法の話を中心に書き、最終的には騙し絵的な話に落ち着くのではないのでしょうか。最近の東大英語の難度の高さ・採点の厳しさを考慮すると、遠近法の話を書いた学生の英作文の得点は、それほど高くなかった、と思われます。

ところで、遠近法は英語で perspective と言いますが、この単語の一般的な意味は考え方、又は視野という意味で使われます。Get a new perspective、という表現は『考え方が変わった。』という意味になり、ネイティブが使っているのを良く見ます。遠近法という意味は受験的には細かい意味になるので、そもそも perspective という単語を使って解答を書いた学生は少なかったと思われます。

この問題を文化的な背景から掘り下げて考えてみたいと思います。

英語の有名な表現に、what you see is what you get という有名なものがあります。見たものが、あなたが得ているものだ、という意味になります。百聞は一見に如かずという意味に近いもので、英語圏の文化では、目に見えるものを重視する傾向が強く、日本文化で見られる、以心伝心的な発想はないです。直接発言しないと伝わらない文化なのです。

例えば、日本で著名な研究者がある英語の勉強方法を提唱したとします。日本人ならば、あの人が言っているのならば、それは正しい勉強方法だと簡単に受け入れてしまう傾向にあると思います。最近では下火になってきましたが、英会話学校が流行った理由も、その実際の効果よりも、その学校の宣伝を担当しているのが一流の英語の使い手だから、というのが大半の動機でした。皆様にも心当たりがあるかたがいるかもしれませんね。

一方、英語圏では、どれほど著名な人物が提唱しようとも、Does it work?(それは本当に効果があるのか?)という発想が常にあります。どれだけ高名な学者が提唱していても、自分に効果(effective)がなければその価値は認めない、というものです。

少し話がそれてしまいましたが、この問題が求めている思うこととは、

見たものが全てという考えが英語にはあるが、この考え方自体時代の風潮に合わなくなってきた。最近、インターネットの普及とともに、偽物の情報があふれかえっている。自分で見たものが安易に信じられない世の中になってきた。情報の裏側にあるメッセージを読み取る力が必要だ。そうしないと簡単に騙されてしまうぞ。これが私の考えです。

### 参考例

There is a famous expression in English that what you see is what you get. But this might be no longer the case. With the internet gaining the popularity and much false information abundant in our daily life you cannot always believe what you see. So we always have to try to get the hidden messages lest we be deceived.

英語圏の文化が大事にしている seeing is believing の精神がそもそもなくなっているぞ。それも、情報化社会の広がりのおかげで。加工された偽りの写真や動画がネット上ではあふれています。何が正しくて、何がそうでないのかが見分けが付かない世の中になってきている。今重要なのは、目に見える情報の裏の意図を見抜く力だ！つまり、以心伝心、腹芸を大切にする日本文化的な発想だ！

ここまで書くと、何か日本を愛する右翼的な思想の持主かと思われるかもしれませんが、私がこの問題を通じて言いたいのは、東大が求めている発想というのは、自分の通常の視点を大きく外して見て初めて、何かが見えてくるということです。解答例にも、写真、猫、指という言葉は一切使用しませんでした。これくらい、思い切った考えをしてみると、東大のような毎年英作の問題のネタを変えてくる大学に対応できる可能性が高まると思います。